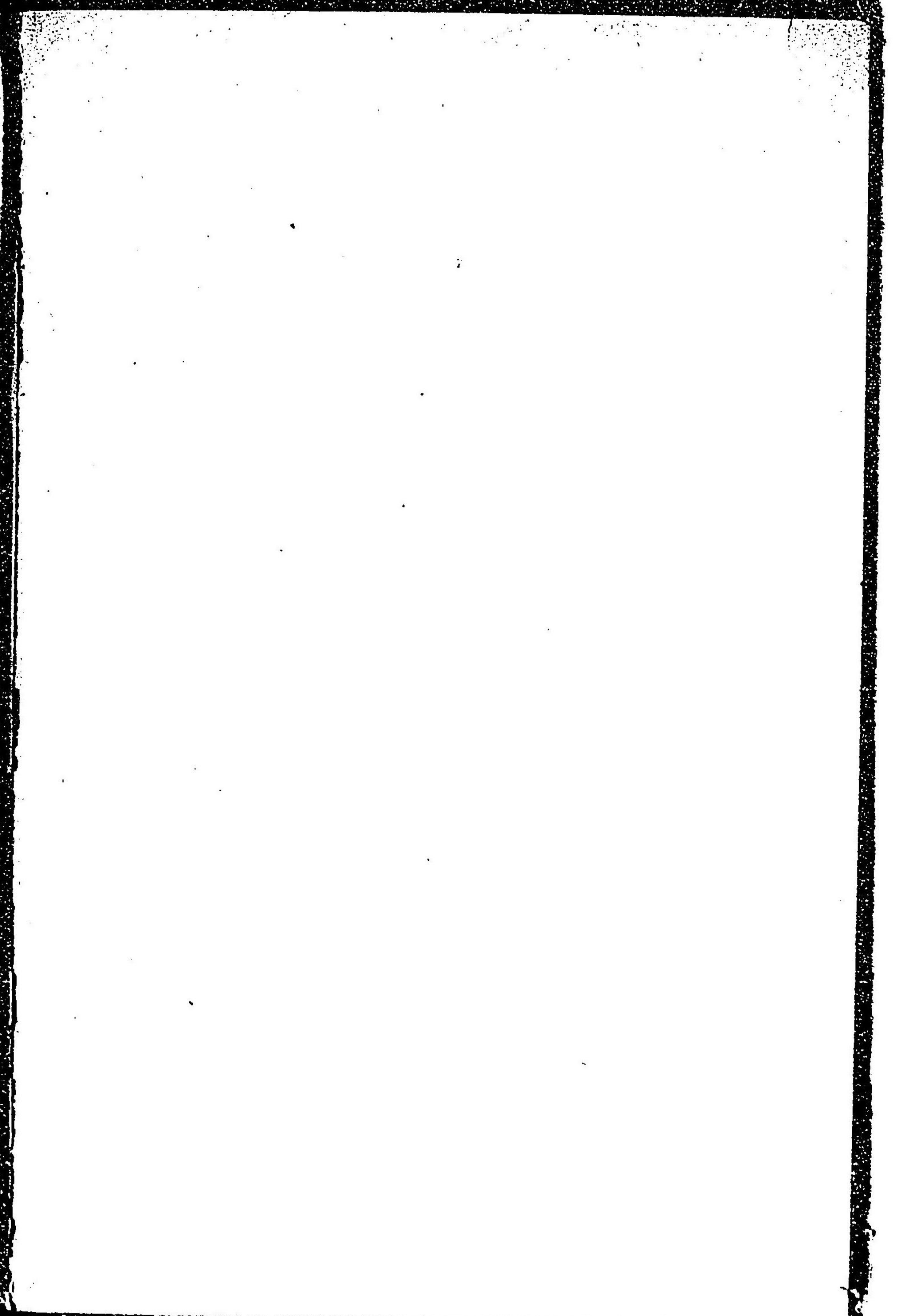
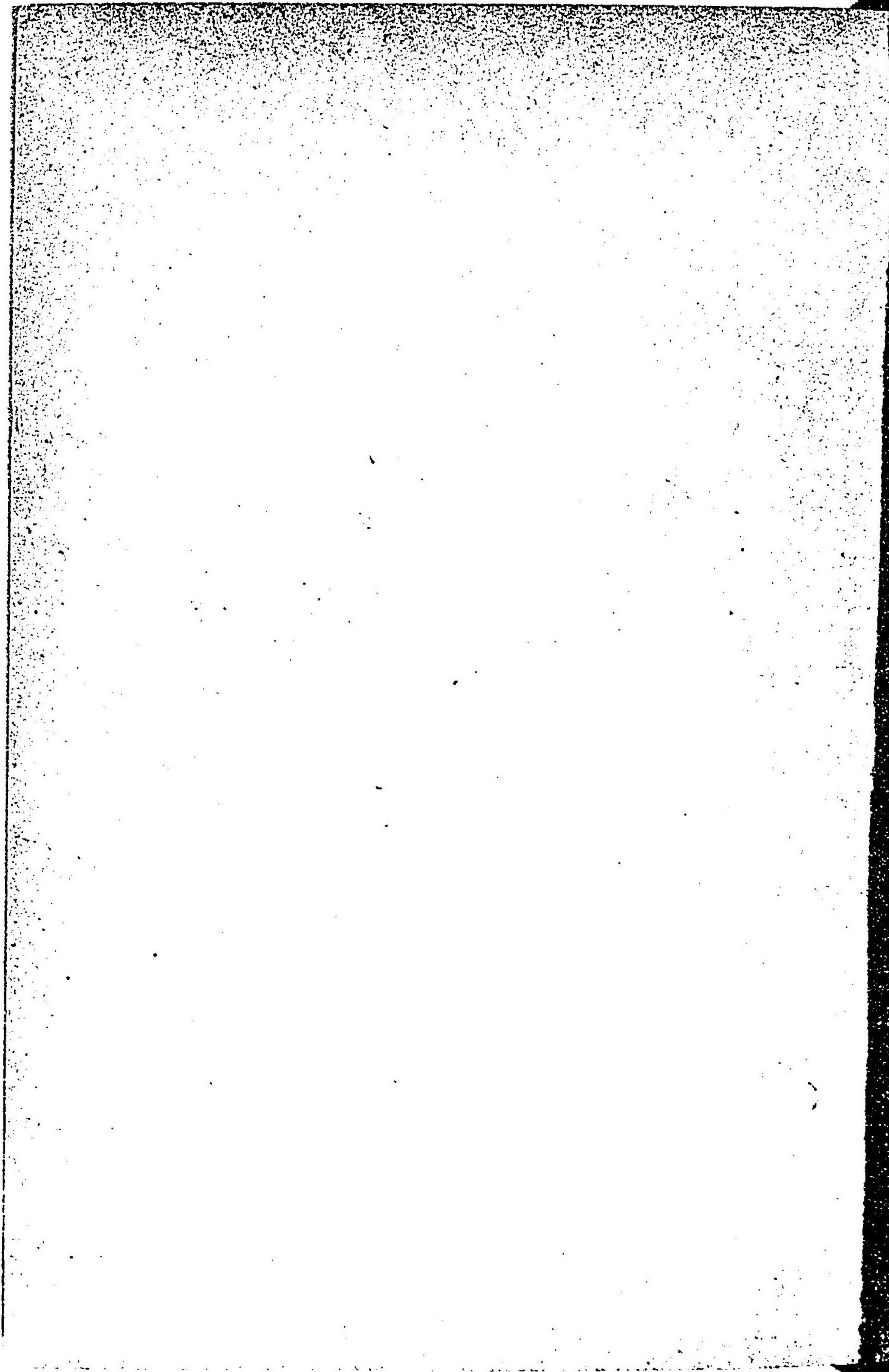


13

554





特13
554

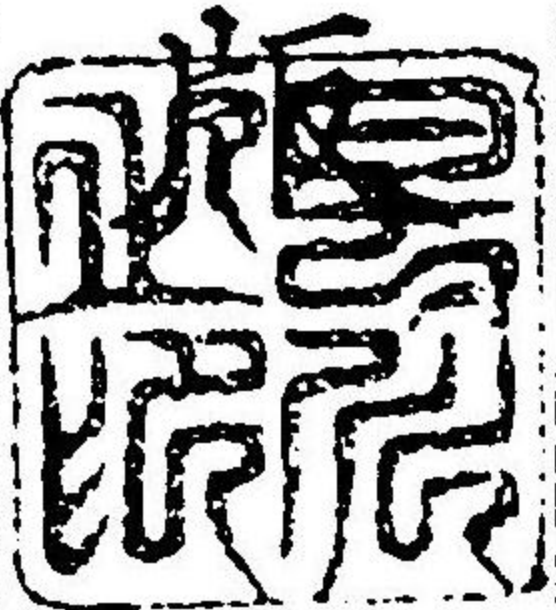
山田保譯

西浮
滑稽

三人
全

版權
所有

早川氏藏



吉原

西洋
滑
笑
大序

天麗かなり腰瓢を帯び蹠跟と早川君の家を
 出で北飛鳥山小遊び芝よ坐して放吟瓢を閑
 き酒を飲むたい怪笑相俱よ笑ふのみ而して
 遙か北の方を望めば野州の諸山また笑ふ蓋
 一是れ山人の笑ふなるべし是を號して三笑
 人と謂ざる可らず顧みて瓢を見れば已よ空
 て顛れ三舛の酒已よ盡く矣三笑よあて三舛
 の酒を尽す此れ是書の題號よ合へり乃ち歸
 來手を拍て三たび笑ひ之を書す

醉多道士



緒言

此書は佛蘭西にて、開板したる、滑稽借家の奇談を
 譯したる者にして、書中に擧る人名等ハ、彼國の言
 葉を其儘用うるも、害あきことあれど、西洋の書を
 學ばざる人々の屢これを採返しても、猶讀と苦し
 き所あらんうと思ひ、其名を甚六又ハ野呂吉など
 一取めて、只管婦女子の分り易きやうに物せるな
 り、且原書ハ長き物語にて、紙數も多分よあれど、其
 中我國の人情ヲ合ハずして、面白うらぬ所ハ大抵
 削り去り、成丈興ある所のみを摘譯して、此一冊と

なしたるなれば、看官其心得よて讀みもし、笑ひも
したまひて、日永の鬱を散ぜられんことを望むよ
なん、

明治十二年五月

譯者誌

西洋 滑稽 三笑人

第一回

西洋人の髻赤しと雖ども之を染バ嘆うなん東洋人の丈短
ろしと雖ども之を接バ悲しみなん所ろれば品川の海の
ツンドの歐洲も變らぬものハ滑稽根性世を迂ボンチと踏
仆し我彌次喜多の失策を面白狸と學びてろ愚狀を尽す一
痴談國の名さへも花魁の佛蘭西國の巴里斯の都よ亂舞迂
奴といふ町ありて、そが中央よ三階作りの貸家あり、其家の
下坐敷よハ齒醫師が住ぬ、其二階には若き三人の男が住み、
其内一人は部屋を別よして居り、他の二人は同じ部屋よあ

二
り、又此三階に一人の産婆が住みける、偕三人の内最も年
若なるは、其名を甚六といひて、齡二十歳となり、容貌も左の
み醜くならず、性質亦愚鈍なるよしあらず、元來瘦形にて、所謂
枯たる柳のごとく、常に心だての能きもの故、朋友より頼ま
れたる事、何事も寄らず好んで之を引き受け、絶て他人に
逆ふ事なく折々事を失錯て、人々笑はるゝの外、義も欠けた
る事なし甚六の一人の會社に傭はれて、一箇年の給料總二
百圓を得る身なれば、元より藝妓娼妓を買ふは、いふまでも
なく割烹店の奢さへならず、只物事約よぞしたりける、又一
人の若き男、其名を野呂吉といひ、年二十三にして、容貌は

殊に美しく、恰桃色なる薔薇の花に似たる様なれども、此男
は性質肥へ太りて居れば、常よ之を愛ひ間がな隙がな我腹
を見て、歎きさすりて、溜息をつき、後よ隔日は腹の寸
方を測り見る程なれば、人々逢ふ毎よ其腹のふくるゝを
防ぐよ策ありやと、いひつゝ、是よ適へる喰物杯を問ふて餘
念のなうりしが、性得大喰なれば己が好む喰物を見る時、
慎み兼て飽まで喰込、思はず後よ悔る事度々なり、又常よ
自惚の色男氣取なれば、往來などよて婦人を見れば、殊更否
な目つきをしつゝ、婦人の傍よ寄りよへども、婦人は却て是
を嫌ひ、逃避るをも知らず、頻よ色情の事のみを工風し、衣裳

形容も心を用心、頭髪は恰も唐獅子の毛のとく縮らせたり、又日頃踊を好み、我部屋の内よて飛はぬれぬも、皆當時の流行よ後れたる踊なれば、人皆野呂吉の踊を見て、此男は以前田舎芝居に備はれたる、下手役者よ違ひなしと、情よ誹謗もあれど野呂吉は、少しも之を心に掛ず、只管廢れたる踊を再び流行せんと心を苦め、折々腹の内よ思ふやう、踊は他の萬の事と一般よて如何程流行を譽るとて、一時の流行といふもの、絶へずよ回轉車輪のとく、假令一回廢るとも、再び故に復るべし、其時よ至りなば、己が名譽の後よぞ知れんと、夫のみ樂しみ居たりけり、其内圖らすも世話をする人ありて、

或る役所よ備はれたり、其給料の年よ三百圓には過ぎざれども、後よこそ大望ありとて喜て勤まがら、人よいふ様凡そ望といふもの、世の貴賤おしあへて、皆望のあきのあるまじ、もし此望のなき時、人生れて外よ樂しみのあるまじ、若き内色情の樂しみも、老て子も愛るれ樂しみも、皆是望の一ツあらずや、あぞ自らすまして其日を送りけり、夫ハ扱て置き今一人の男、其名を氣拔太と呼びて、其容貌ハ至て醜く、色の眞黒にして眼のぞんぐり、鼻ハ獅子ある上よ、頬骨高きゆゑ、其顔ハ奇妙奇列なれども、性質ハ伶俐くして、常の話ハ最面白く、他人の噂をしてハ喜びけり、氣拔太ハ年二十七

六
歳なるが、八年前より巴里斯に來り、法律學を修行して、代
人よあらんと思ひ、其學費の年々親父の元より三百六十圓
程宛送りけるが、餘り年數の掛りければ、親父も今ハ待遠
思ひて、一週間は一度づゝ、ハ、悴の元へ手翰を以て催促する
やう、汝ハ早く代言となりて、なぜ金を儲けぬや、日々新聞を
讀むハ犯罪人や盜賊や人殺でいつも半ばハ埋る程なり、左
すれば悪事をなす人が澤山あるハ違ひなし、成丈夫等の
人ハ出逢て、代言を頼まるゝ様ハ心掛よ、もし頼まれたなら
其時ハ何んでも口數を餘計ハ聞て、汝の名が世間ハ廣
るやうよせよ、もしや口から出放題を嗜汝の知己ハ罪を負

するなどハ會酌して、事の是非を誤まり我名を汚す事ハ
べからず斯く親父よりの手翰を見れど、いつも返事を出
事もなく、日々往來よて知らぬ婦人よまで、くだらぬ世辭な
どいひけるよ、婦人の一目見て醜男なるを嫌へども、其話加
減の巧みなれば、別ハ怒もせず、いつも足を早めて行過ける
或日甚六ハ氣拔太よ向ひ甚、ナイ、お前は先頃己よ若ひ婦
婦を世話する約束ぢやアねハかぼん、そりやア忘れねハ
が先づ己の餘るくらぬよなると、お前よも擬ふ積りだが
お前は一體色情師といふ面つきでもなく、そして餘り厚か
まし過るから出來ねハか、もし知れねハせ、甚ナニ馬鹿をいひ

ねへ、時よ己のふいふ譯やら美しひ奴も出會すと、何んだ
か胸がドキ／＼して話も出来ねへ、ぼん「成程初心の内、さ
うありさうな事よ、夫れぢや、ア先づ醜へ婦人よ話かけて、追
々上等の口よ取掛んなせい、甚そりや、ア餘りまだるい、醜い
婦人はどふいふ譯やら先祖から出が好ねへ、ぼん「何んよし
ろ色男は外貌が肝心だ、そして帽子は少し横よして、往來を
歩くよも、成丈意氣な風を見せて、口よは巻煙草でもくわへ
なせへど、互よ興けよ話の中へ、野呂吉が入來り、野呂「前達
は何をして居るの、今夜の家主から踊の會よ呼れたぢや
アねへか、踊の會よ招かれたる男女らつとも早く金の面
の客互よ踊る事と知るべし

工でもして、古着の箒段でもせよや、アなるめへ、ぼん「ム、そ
ふよ夫が肝心だ、まかし己は別に當もねへから、一切愛の
前達に委任状とまやせうよ、甚ム、そりや、ア合點だ、兎も角
も野呂公と二人で出掛やうぜ、といひつ、二人は階子を降
りて門口より東西に分れて面へ出で行きけり間も無く日
も暮ければ氣拔太は頻りに二人が歸るを待兼て窓を開き
ては首さしのべ最早歸る刻限だが馬鹿／＼しいもう九時
過だらふ一寸時計でも見やうオット己の時計はどふよ、質屋
へいつて流れてままつた其時計といへば百合の様な大時
計だつたが器械のなか／＼慥だつたそして親父より貰つ

て大事よしと云入れたが今とあつちや惜い事をした時
よ下の齒醫師で時を聞う併し過刻も一度聞たから又行
のもおかした物よ三階の産婆とまやうかイヤ待あの婆の
已と滅法交際が善くねい、それといふのも取揚を度々頼
まねへからだ何よしと當て碎けるだ一番出掛て見やうと、
三階よ昇りて産婆と記したる表札の前よイヤ鈴を鳴せば
産婆の懸意な人と思ひ大きき聲よて産婆何よ御用で御座
いますかばん「ハイ我の悴が生れやした産婆「チャ」そふ
ぞすかと嗅烟草を鼻の穴よ一ぱい詰込出來り西洋の嗅草
穴よ詰なり嗅そしてお子さんの何處よお出ですばん「左様さ

悴の今股引の内へ入て置ましたが産後の虫氣も梅毒氣も
無く殊よ朝晩の至つて丈夫で御坐いやす夫よ我のどふい
ふ譯だか夜るよなると脊骨の兩方が痒くなるが誠よかさ
悪い所で困やすから夫を御相談よ來やしたのさ産婆「オヤ
ろんな其事を云よ來なすつたのかへばん「イヤ全くさうい
ふ譯でも御坐やせんが貴女に取揚もなさるから少しの醫
心もあるかと思ひやして産婆「私に醫師杯の致ません外で
れさ、なさいと少しムツすればばん「お婆さんお待くだ
せへ實の外よも御尋ね申してへ事がありやす夫や別の事
でも御座やせんが我の金時計が止まりやしたが此金時計

へ以前三百圓で買ましたのよどういふ譯で止りやしたか
 夫故時が分らぬへで十方よ暮升産婆そんなら時を聞よ此
 夜中私共の鈴を鳴したのかへあんまり遠慮のなさすぎるか
 方ぢやもういゝ加減よしてくださいばんそんなら歸り升
 から一寸時計を見てくだッせい産婆私の時計ハ止つてぬ
 ますよばんそんなら置時計でもへ産婆るれも振が止つて
 ぬ升よばんそんなら日時計でも産婆もふ深山です喧しい
 といひつゝ、婆ハ腹立まざれ力一杯よ戸を閉る機會よ氣拔
 太の鼻を少し搦こわせハ氣拔太は顔を擧めて證やう己の
 高ひ鼻をつぶしても追出す積りか、ひどいめよあはせやア

がつた併し己の鼻は左程高もぬへが何よしても此仕返し
 をまてやらうと暫時手を組考がへじが氣拔太ハ點頭なが
 ら額よ手を當てこいつは面白い考がへだ直よ取掛らんと
 己が懐中より小刀を取り出し産婆の入口よ張付たる表札を
 引ばづし忽地下よ降りて又齒醫師の表札をも引ばづし其
 跡へ産婆の表札を張付再び、三階よ昇りて齒醫師の表札を
 産婆の入口へ張付一人笑ひて思ふやうかう取換て置けを
 明日ハ吃と面白い騒動をぶち返すよ違いなしき時よもふ
 二人が歸る時刻だと下よ降りて我部屋よ入らんとする時
 靴音の階子の下よ聞へければ誰だかと思ひしよ兼て待た

る甚六にて例の通り鼻歌を歌ひながら戻りけり

第二回

氣拔太甚六の二人の共々連立て己が部屋より入り甚六の前
の下は何をして居たれば「ナニサ時が分らねへから産
婆に部屋へ行って聞た所が時も教へねへでお負に己の鼻へ
疵を付やアがつた餘り惡しいうら惡腫らをえてやつたの
よ今も分るの夫より肝心な黒の着物の面工が出来たか甚
六丸で大外れよ是非とも借なけりやアならねへよ友達ハ
生憎留守よばん「そいつのつまらねへ併し野呂的のどふだ
か知らんて此奴も同じ様よ金の面工が出来ねへ時よやア

今夜招れた踊り出掛る事が出来ねい甚六「さうよ惜ものだ
時よ家主は嬌さんの素的もねへ金持ださうだそして此家
ばかりぢやアねへ巴里斯は大通りも何軒もなく家を持て
居るさうだ其内も自分住でる家なんぞの立派なもの
でそんな踊を催しても差支がねへとよ今夜ハ已達も是非
行て見てへのだ一体あの嬌さんの外の家主と違て欲がね
へせ店子よの親切で家賃がとこはつても催促のさの字
も云やアしねへ適々家賃を拂ひよ行と態々お出でお氣の毒
だ決して家賃の急ぎません若ひか方の金の入るものだ以
來ハお急ぎよハ及びませんといふ所が難有實よ珍しい女

十六
よ其處で己の外ほかの店へ引越す了簡りやうけんのねへせばん「よ、己も其積りよ時よ外ほかの店子よも己おれ杯なと同じ様よ親切せつてんとするのが知らん其處が分らねへ何なにしろあの嬌さんめいさんのもう四十七八だらうが滅法めつぽうよめかして居から吃くと若わかひ者ものよハ腕うでからうと思ふぜ夫よ此頃ハ己おれよ少し氣があるやうすだら己おれもあの嬌さんを見るとき愛あいぞと思つて氣取て見せるハ甚馬鹿ばかをいひねへ氣取た所がそのシャツ面つらでハばん「なんの己おれあら大丈夫だいじゆうだか前の様な不意氣ふいぎあ代物しろものとハすこし當がちういやす甚六「籠棒かごぼうめ己おれの不意氣ふいぎよりハ前ハ面つらハ實じつよ小機こきねへまだしも野呂公のろくの方が太ふとても見所けんじょがあるぜばん「ナニ

十七
面つらで色いろをするものう野呂公のろくハ腹はらハ随分荷にだぜ甚六「そりやア兎も角かくあの嬌さんが若わかしか前まえよハかり氣があるまう野呂公のろくや己おれよまで親切せつてんよする課かかねハばん「ム、分わからねへ事をいふぜハ前まえや野呂公のろくハ己おれの友達ともだちだらうらハ前まえ達たちよも親切せつてんよすりやア己おれが悦よろこぶと思つて居るハよ甚「肚胸はらむねハいひ事をいふぜそんなら家賃かぢんのど、こほりを催促せいきしねへも己おれの爲ためだと吐はすだらうハ、ア！時ときよハ前まえハ何時いつでも人ひとよ嘶なをするよ大たいそうよ螺らを吹過ふきるぜばん「そうよ其處が肝心かんじんだまんだらでもねへその證據しやうこといふハあれくらい螺らを吹ふておひたから今夜こんや招まねかれたんだ其時そのときハ言葉ことばよも是非ぜひハ出いく

ださい吃と待て居り升と云たぢやアねへが甚併しあの婦
 さんがさう云たよハ違ねへがまさか已達が黒の着物がね
 へどの思ふめい着物を招かれたる事と知るべし行
 なけりやアあは嬌さんが怒るかも知れねへ夫も正直な女
 だから食事の設もあるよ違ねへ所で已の股引と手袋より
 外はねへのだばん「已ハチヨッキと襟巻ざりて野呂吉ハ上
 衣だけだ實は困つたあアチヤ時ハ野呂公の足音がするせ
 金の工面が出来たうも知れねへと二人断の其中へ野呂吉
 ハ入り来り野呂「イヤ甚公ハもう歸つたな已ア夕飲を喰て
 から丁度二里も歩いたがそれですつかり草臥だもうさふ

する事も出来ねへばん「さうか併し金の算段が付たら歩い
 たのも無益よアなふねい野呂「ふ、さうよ已の懸意を所
 ハみんな歩いて見たが誰でも貸は貸のよばん「そいつハ
 妙だ野呂「併し金がねへさうだからさうもこふにも仕方
 がねへ所で幸ひ己の甥の事が胸に浮んだ是りやア身上が
 滅法界い、から大丈夫と思つてそこへ行と折も能く丁度
 出掛るところよ甚「そこで金を貸たのう野呂「マア待よ、そこで
 己が二十四五圓でい、ら金を急ぎ貸て呉ると頼んだ所
 が彼奴のいふよ、そりやア容易御用だ三十圓だけ御用達
 様とい、やしたばん「エ、そいつハ妙だ何しろ其金を早く

拜まじ給へ野呂「マア待せくめへ」其時又甥のいふよや
 ア今日にいけぬいからもう四五日も過たら聞よきあせへ
 といふからこいつも矢張いけぬへのよぼん「なんだとあん
 まり人を馬鹿にするせ出来なけりや出来ぬへといやア云
 ひのよつまらぬへ長咄で時間が滅法過たせ野呂「さうお怒
 んなさんな仕方がぬへもし其時甥よ金がありやア貸ても
 呉たんだぼん「さうお前にいふけれど五六日も立て行て見
 なせい屹と留守だとぬかすぜ甚「去て見りやア計策も尽た
 様な形だと三人の共よ溜息付て暫時の咄もせざりしが突
 然氣拔太は聲を張上げぼん「イヨイ奇妙くはッかり乍ら

計畧を捻り出しやじたせ迎もてふいふ考への先帝ボナバ
 ルトでも覺束ぬへ何の兎もわれ二人とも祝ひたまへ淨め
 たまへだ先今夜の會は玄めこ〜野呂「そりやア又さふい
 ふ覺束やうだぼん「三人一所といふ譯にやアいかねへが先
 己の考へよやア一人も揃つた着物の持ねへから其處で三
 人のを一ツに集りやア一揃出来るだらふ先甚六が股引と
 手袋よお前へ上衣で己がチヨッキと襟飾よ、こいつを一人が
 ット着込で先陳をやづけ向へ行たら菓子や氷を喰込で二
 時間づゝの交代とやらかし換へよ同じものを着替て行の
 よ夫よ僅三四丁と來て居るから譯もぬへ咄だ野呂「そりや

ア何だか氣まりが悪いぜ甚併し面白い考へだ何でもマア
 行れりやアいひぢやアねへかばん「さうよ併し一番終ゝ當
 る奴は運がいひせ夜食に是は夜の三時過にありつくだらう
 其所でいはずと知れた終は發起人の己とやらかそふ野呂
 「さうはいかねへばん「そんなら恨このねへ様又聞取とやら
 かさう甚「こいつはい、思ひ付だもう何しろ十時半だぜ遅
 も十一時よハ先へ一人出掛るとしやう「此時氣拔太は一枚
 の紙を取出し三ツ又切て一二三の番號を記し是を堅く捻
 りて冠の内へ入れ置きばん「お前達は眼を閉て是を取させ
 いと、いへバ二人は手早く冠の内へ手を入れ圖を取り開き

見て甚「ヤア己が一番だ野呂「ナニ己ハ二番かばん「じめた己
 は三番だ併しこりやア全く運がいひのだ夜食とは難有爰
 が残りものに福といふやつよ野呂「兎も角も甚六が一番だ
 早く支度をやつかして行がよからうといひつ、己が上衣
 を取出し氣拔太甚六もチヨッキ股引手袋を持來り手早く甚
 六又支度を調へさせしよ野呂吉れ上衣なれば丸で大風よ
 衣といふやうな風体あるを二人は見えて笑ひを忍び最時言
 葉もあかりしが風が持來る遠寺の鐘ハ今正しく十一時を
 報たれば野呂吉ハ甚六又向ひ野呂「早く行ねへろして菓子
 や氷をやつかしたら一時よア「屹と御歸館だぜ甚「アット

よし／＼約束違はぬへがもし家主の婦さんがおせね前方
 の一所よ来あさうあいといつたらさうしようばんさうよ
 二人の跡から直よ参り升が涉存じの通り馬車が拂底だか
 う夫で手間取ので涉坐やせうといつて置ねへ」と聞て甚六
 の點頭つ、階子を降りて家主の許をさしてぞ急ぎける

第三回

凡そ世に守銭奴といはる、者多くは貸家を作りて其店賃
 を責り貧しき者と見る時は僅かの金に高利を貪り他を憐
 むの情無きは何れの土地も多かるよ此家は主人の婦よ
 て齡ハ五十路よ近けれども最健康よ暮せるハ人を憐むれ

情よ愛て神は恵もありしあらん常よ貧しき者よハ金銀衣
 類を施し殊よ店子をも勞りて折々の物杯送り店賃の催促
 ハ絶て爲す事あし以前夫存生れ時ハ材木を商ひて巨萬ハ
 金を貯へしかハ今とありても年々よ貸金ハ利息許りよて
 二萬圓も得る程あれハ家の作りも最廣やかよて下女下男
 も多く遣ひて日々華美よぞ暮せるハ實よ有福とハ知られ
 たり其内よ一人の娘ありければ母の寵愛事大方ならず日
 々よ蝶よ花よと育てければ娘ハ最虚弱よて稽右事さへ手
 よ付す終日一ト間に閉籠りて退屈よぞ見へよける或日母
 ハ娘を見て思ふやう日々よ斯して居る時ハ氣鬱の病よ掛

らんかど苦しき胸をあで落し娘に向ひて問けるやう母「お君よ汝のもう十七で嫁盛だが何處へも縁付氣のあいかさきみ「ハイお母さん私しや劇場を見たりほしい着物を着る此が楽しみですがお嫁よでもいつたら最樂みがあり升かへ「母夫の又どんあよ楽しみか知れあいよしかし汝の誰ぞ能いと思ふ男があるかへおきみ「別よ誰もありませんよ母「そんなら私が似合ひる婿さんを探んであげやうおきみ「私しや美しひれが能う御坐い升よ母「それの誰でも當り前だがお前が手を引れてあるいても皆が贖やうな婿さんを取て遣たいよと暫時考へしが又娘に向ひお前春吉さんを何

と思ひだおきみ「あの人能御座い升ねへ母「さうさ年も二十二三位で身代もよし家柄もよいからお前が嫁になると自然上等お方と交際も出来るよおきみ「それぢやアあれ人よしたいねへと親子二人が心れ内よ悦びつゝ其後彼春吉が許へ人を持ていひ入れしよ春吉も悦びて忽地相談調ひ間もなく婚姻も終りて後二年も過ぎければ今宵は踊を母の家よて催せし事と知るべし斯て此日も暮果て夜は十一時よなりければ諸力より入り来る婦人の爰を時とぞ飾ひたれば座中いいと賑かよして美しくしく四季よ詠むる其花を一時見たる心地なり此時甚六は入來りて此形容



を見、殊よ色採たる燭臺よて晝中の如く燈りければ氣拔よ
取れてイたるを主人は見て傍よ寄り主人「甚六さん今晚は
能くお出くださいましたそして跡のお二人さんハ甚ハ
直よ跡より参り升が多分馬車が間よ合あいで涉座やせ
う主人「チャ近いのよ馬車でお出ですかホンニ今日は人の
集るのが遅ひ事あの私の婿も娘も未だ見へませぬ甚さや
うさ當時の流行だら是も馬車がないので涉座やせう主
人「ナニニ婿の自分の馬車があり升がまかし十二時過よあ
らなけりやアいひが甚左様で涉座すか時よ私の友達も色
々用があり升し夫よ馬車が間よ合あいで多分遅くありや

せう主人「夫ハ涉氣の毒様しかしああたハ今晚踊よ出ませ
うねへ甚ハイ踊ハ大好物ですからいくらでも踊ますとい
ふ内表よ馬車の音が聞へければ主人は走り出でしよ娘と
婿なれば大悦にて二階へ誘引挨拶も終て座も定まりけれ
バ甚六ハ傍よ居合せたる妻君と共よ踊をぞ始めり此妻君
ハ容貌ハ美しけれども外貌よ構ぬ人を見へ甚六の見苦し
き衣服よ比ふれば丁度釣合も能きゆえ甚六ハ得意なり
て踊たるよ元より瘦男にて野呂吉の上衣なれば自づと脊
中よ風が入て幌の如くよ脹けるを見物したる人々ハ是を
見て小声よいふ様娘客あの人をみ見なさひな飛度よ脊中

が脹れ升よ今二人の娘「あれは衣服ぢやアありません袋で
 さアね娘客「さうですなへ丸で脊中へ風船でも仕掛た様で
 す今に天井へ飛揚るかも知れません杯と咄すよぞ甚六の
 其様子を見て己を讀るならんと益得意なり續て踊しか
 が見物の又小聲よて娘客「あの袋が又踊升よマア涉覽なさ
 い面白う涉座い升ねへと多くの見物が小聲よいひしろバ
 終よ甚六の耳よも入て腹立しくや思ひけん踊を止て足早
 よ人の影よぞ入よけり此時主人の甚六が傍よ寄り主人「か
 勞でせう今に私の娘も踊升から其時又御一所よ甚へイ畏
 まりましたと此二人の咄を聞より婦の願て妻の傍よより

婿「お君やお前もし彼所よ居る袋が一所よ踊うといつたら
 いやだといひあよおきと「アイどこよそんな人が居升へ婿
 「か前彼處の窓よ居る人さ、そして窓よ下ッてゐる切で顔を
 隠して何か喰て居ね、なぜか前の母さん、あんな人を呼
 のだねへおきみ「あれで何かあれの店子ですよと咄の中へ
 甚六の口をふきく「お君の傍よ寄り添御新造さん私と一
 所よ踊てくださいあおきみ「私、今晚勞て居升から御免を
 蒙ませう甚「チャお勞どの浦山しい併し少しのお勞なら踊
 と治り升からは是非御一所よといひつ、手を取らんとするゆ
 る婿の見兼ねて甚六よ向ひ婿「今聞升れば妻がいやだとまう

すを是非踊とおツしやるの無理でありませんかもし妻
よりお断りなうして御不足なう私も共々お断りをまうと
ませう「甚」イ、エ決して夫よの及ませんといひつゝ、主人の傍
へ行き只今か聞の通り御亭主よ邪魔を致されました主人
「夫のお氣の毒な事です私より今一度娘よまうしませうと
主人の母の娘に向ひてナせお前の彼人よ一所よ踊ないか
い餘程面白人だよおきみ「いやですわへ母さん御覽なさい
よわの人の着物といへばふくくして踊て居る内よ脱て
しまいまさアねろして皆なが袋だく」といふから私にい
やですよ又母さんいなせめんあ人を呼だんでも主人の母

「ナニそんな事をいふ物ぢやアない何しろお前一ツ踊よ皆
さんもお前の踊をお待兼ぶねおきみ「私彼所よ居る子と一
所よ踊て今の夜よ見せてやるわと立上り一人の娘を誘引
て踊を始しかば甚六の面當にする事と悟り口小言をいひ
つゝ、此場を去りて次の座敷よ行拳の如き氷の塊を口よ押
込接接もせず階子を降り我家をさして戻けり斯て氣拔
太野呂吉の二人の甚六の噂よ時移て互よ興ありげよ咄の
中へ甚六の階子を昇りて我部屋よ戻しかば二人の見て思
はず悦び野呂ヤア噂すると影といふ奴よ滅法お前よしら
ヤア早がつた未だ十四五分前だぜばん「ナイ時よ踊の面白

くあがつたか甚ム、餘り面白もなかつたか負よ上衣がお
 笑ひので實よ外聞をふみつふした己が踊と見物の奴等が
 グズ〜笑ヤアがつて己れ事を袋の中よ這入て居るの今
 に踊て居る内よヤア上衣が脱てしまふの何のとぬかしヤア
 がつて實よ氣色が悪かつた夫も男なら兎も角女が笑ヤア
 がるから猶更よぼんそれでも菓子滋山喰らう甚ムウウ
 すてらう羊羹ならいゝが五十のふかし立よ氷よぼん夫の
 いゝが跡で夜食が出さうか甚さうよ夜食のあるかも知れ
 ぬへがお前の分多分ぬいさうだ野呂ろんを事は心配よ
 ヤア及ばぬ〜甚公早く着物を脱ぬへう己が是からいかな

くつちやアならぬへ見や其着物を己が若と立派よ見へる
 の杯といふ内甚六の手早く着物を脱捨る傍より野呂吉の
 其着物を着換あがら野呂ナイ氣抜太何時又歸らうかぼん
 一ろりやア約束通りよ野呂時よ己の肥て居るせいか股引が
 窮屈で漸とはいたせ丸で足へ張付た様だ跡がむまくいけ
 ぱいひが甚我慢をえぬへとふせむまくいひかぬへはサ野呂
 何しろ此着物で無つちやア行れぬへから仕方がぬへ若た
 事ア着たが實に苦しいせ其内馴たらよからうぼん「グズ〜
 いのすと早く行かッしろして三時よヤア屹と歸んだぜ野
 呂マアそんな事をいはずと待ていやむまくい行やア夜食も

喰て来わといひつゝ、股引よて股の痛さを堤あがら顔を皺
 て階子を降り兎の如く一足飛よ走つゝ、家主が宅よ至りけ
 れの少しも遠慮なく踊の席よ入り主人の前よ進て今宵の禮
 をぞ述よける主人「たいさう遅う汚座いしました先尅うらか
 待まうして居ましたそして氣拔太さんも汚一所でせうね
 へ野呂「へいあれの只今馬車よ金を拂て戻やした一體あの
 男の元私の召仕の様あものであり升が生質横着者で困さ
 りやすいづも主人へ差上る家賃を彼よ持して出し升と竟
 よ届た事があるとか、夫故追よ嵩ましたが決して私を悪く思
 てくだせへやすな主人「そんな事は兎も角も今夜の踊てく

ださるだらうねへ野呂「へい幾許でもやつつけやす主人「夫は
 能汚座い升そんなら彼處よ居る若いか方の一度も踊か出
 ませんからあのお方と一所よ踊てください野呂「へい畏り
 やしたと立上れば主人の跡よて婿よ向ひあの店子のか氣
 よの障り升まい前の袋よの大違さ婿左様さあれの袋の中
 よこそ居ません股引の窮迫事丸で粘で張付た様です
 主人「お前さんの何かしら人のあらをかいひだねへ婿「なよ
 さういふ譯でありませんマア彼人を汚覽なさい實よ窮
 迫らしひの歩行のを見ても知れ升あれでも踊積かしら
 ん主人「併しあの人には踊の能し升よ世間でも評判さ婿「さう

四十一
ですか何しろ粘付股引の踊を見てやりませうと咄れ内頼
て野呂吉は娘と共踊しが股引の窮迫さよ小股よ足を曳
くはね廻れば見物の娘は是を見て娘客あの人踊丸で
役者の様ですぬへ男客奴のは奇妙な踊だ屹と以前芝居
のペイくかも知れぬへ杯と咄の内野呂吉の草臥たると
見へ一ト休したるよ傍よ居たる若き男の咄を聞バ男チイ
今夜は食事の設があらう今一人の男ム、立派のが出
るさうだ男どふして夫を知て居るんだ今一人の男あせと
いつたつて主人が己の叔母よいふよやア餘り菓子をとん
と喰なといつたもの斯二人の咄を野呂吉ハ聞て一人黙頭

四十二
己もそんなら菓子を扣へやう、イヨフ酒を持出したぞ酒は
幾等呑でも夜食の邪魔よやアならぬへ何よしろ難有今一
ツ此勢で踊てやらうと再び踊ければ多くの見物は恐もあ
り笑ふもありて最賑ひける野呂吉の股引の細にも構はず
漸々踊が身に入て大股よはね廻れば如何したりけんピリ
くと音して股引の前より後の方よ破れしよ後の破目より
の縋絆のたぐまりが飛出しフアく下りたるも知らず夢
中よなりて踊じよ又も前より黒く垢染て破たる下股引が
チアく見へしかバ見物のドット笑ひ出し腹を抱ゆるも
あり婦人の扇を顔よ當て笑ひを隠もあり中よはたまり兼

て此席を外もありしよ野呂吉の何の氣も付す猶も踊り身
 を入しかば主人の見兼て野呂吉の傍に寄小聲にいふやう
 主人「お前さんの容よ、前の物やお尻を見せる積ですかへ野
 呂「なんですと主人「マアお見あさいといひつゝ、股引の股を
 指させば野呂吉のソヨ／＼風の股よ入るゝ氣が付て見れ
 ば種々の垢染たるもの、飛出せしかば歎なき顔色よてナ
 ンダいめいましい是で皆なが笑ふのかお負ふ小穢物が飛
 出しゃアがつた主人「おせあなたゝろんな細い股引をお拵
 なすつた野呂「私に是が立派と思ひやしてさ主人「併し只今
 の様な事がありましたしての餘り立派でもありませんねへ野

呂「だが踊り差支のありやせん主人「さうでのあり升か種々
 見たくもあゝい物が澤山見へましたよ野呂「そんな物が幾許
 見へても差支のありやすめへ主人「あなた夫でも皆なが笑
 もするし夫よ細君達と踊りの不都合でさアね野呂「左様々
 々是の閉口到まやしたもう私にお暇とやりやせう實まつ
 まらねへと口小言をいひつゝ、戻らんとせしが夜食よ心や
 残りけん再び立戻りしよ又もや多の見物の野呂吉を見て
 笑ひければ是非なく此場を立ち去けり

第四回

甚六の巳に眠に就たれど氣拔太の野呂吉の歸りを待て折

々門口へ出ての詠め入ての溜息つみて居たる所へ野呂吉
 が戻りければ氣拔太の悦びて、ばん「イヤー野呂公か早かつ
 た今しがた二時半を報ばかりよ心持でも悪かつたのか野
 呂「ナニ病氣でもなんでもねへが嘸お前が待どほだらう
 と思つてよ夫よあの婦さんがいやな眼元をしちやア止る
 けれどそりやア朋友よやアけへられねへうらばんムマク
 いふせごふでもいひわ早く其着物を脱でよとしねへナそ
 して夜食の出しさうか野呂「ごふだか知らねへ己アそんな
 ぢみつたれを事の氣が付ねへばん「ナニ夫ぢやアお前喰て
 ろまつたのぢやアねへか野呂「馬鹿アいひねへ何しろ是を

着換て早く行きぬへと脱たる着物を投出せば氣拔太の手
 ん取ばん「己アお前の様よ肥ちやアいねいからどれも樂よ
 はいるといひつ、股引の破たるを見て驚きユリヤアごふ
 したのだ大變な事をしやアかつたなア野呂「ム、夫か何も
 己が能としたといふ譯ぢやアねへ寶のそんな番狂せで早
 く歸つたのよばん「とふと白狀よ及んだあ野呂「お前んそい
 つをはいて行積りかばん「馬鹿アいひねへけふハ上等の客
 も居るのよこのさまで行れるものか是から門番の妻君よ
 縫て貰うのよ野呂「そいつハむめへ考へた彼よハ屹と縫る
 ぜあいつの亭主ハ靴職だものばん「それぢやアさうしやう

是から門番を起すのだと氣拔太の階子を降りて門番の入口より行き戸を叩けば門番の妻「誰ですへ今時分ばんイヤ妻君ですか實の折入てお頼がありやす親父今時分何用があるのだ妻の寐巻姿を見よ來たれぢやアねへかばん親父さん我の前の妻君よとふのこふのといふ譯で來たのぢやアぬへ今夜の家主より呼れた所が今股引へうざざきをしやしたから上手なお前よ縫てお貰いもうしよ來たんです親父「さふいふのは氣拔太さんか己ア縫事あら若い時分の瀬戸物でも縫たもれだドレやつであげやう妻お前さんマア寐てお出で私が一寸縫てあげやうといひつゝ、蠅蠅よ火を

點し針と糸を持來り寐巻の儘よて戸を開けば氣拔太の悦びて内よ飛入り直に後向とあつて上衣をまくり尻を出せば妻君の驚き妻「いやですぬへ何をか見せなさるのだへばん股引の尻が破たのだから其處を縫てください妻私が生てから今迄こんな所を縫た事ありません夫よ親父が見ると怒升よばん靜よしておくんなせへ親父さんの眠て居るだらう妻夫のさうと針をさそふかと思つて心配ですよ夫よ下バきがないからあおなひものさばん下バきあぞへ入らぬいもんですまさうの時よやア急よ間よ合やせんハ、、、妻「いやですぬへ私の亭主の通常二枚づゝはいて

居升よばん「チ、イタ、尻べたを縫ていけません妻さ
うですぬへさわりましたかい成程お尻も一所縫て
脱時困り升ねへ此二人の咄親父の眼を覺し親父「あ
だ悪しひ所を縫せ丸で醫者が瀧腸でもまやアしめいし、さ
ういふ譯ならお前縫せるれぢやアねへハドレ己が縫て
やらふと靴用ゆる針と糸を持來り妻君を脇へ追遣て氣
拔太の傍よれば「ばん「コリヤア難有か前さんなら大丈夫
よ縫やせう親父大丈夫とも夫の請合だ外が切るとも縫目
ハ切ねへばん「そりやア奇妙だと暫時待内出來上れば氣拔
太ハ頻禮を述飛が如くに家主の許をさしてぞ急ぎけり

斯て家主の主人の氣拔太の入り來るを見て出迎ひ主人「チ
ヤ、能お出なさいました馬車屋よ賃錢をお拂ひなさる
よ今迄お手間取升まいよそしてああなたのお仲間ハもう
お歸りになりましたよばん「へエなんの事だら能分りやせ
んが實ハ我ハ外の踊招かれやして竟遅くなりやした主
人「ア、そふですかといひつ、主人の婿の傍よ寄り小聲よ
てあの人の袋でもあし股引も張付てハありませんで能風
でせう此時婿の苦笑をしながら至極能風です主人「あれ人
よ一ツ踊して見ませう婿左様さ私うらさうまふして見ま
せうと氣拔太の前に行きあなた一ツ踊てくださいばん「今

夜の外で二三軒踊て参りやして草臥ており升うら御免を
 蒙りやす婿さうですか時にあなたに甚六野呂吉とかいふ
 お二人のお仲間ですかぼん左様です三人とも此方の店子
 で御坐いやす婿あのお二人のお早くお歸りになりました
 其内肥たお方の御存ですかあの人のお股引の丸で張付たや
 うで踊うちに破ましたが實にお笑おもれをはいており升
 ぼん夫の面白ふ御坐いやしたらう私にそんな男の一向存
 ませんなぜそんな細い股引をはいてゐるのでせう婿左
 様さ自体の作がいひので夫を見せやうといふ積りかも知
 れませんが今一人の大違でブクくした上衣を着て丸で

袋の内も居るやうでありましたが有りやア二人とも自分
 のでいあり升まいよぼん成程そりやア甚六とういふ男で
 せうがあれの瘦形だからいつう肥た時に要心よ大ぶりよ
 拵へるとういふ事です婿そりやアさうとあのお二人の裁縫
 職でも取換たら丁度能からうと思ひ升よ時よああたの先
 刻から立てお出でお草臥でせうマア腰をお掛あさいぼん
 「ハイ難有御座いやすと腰を掛しよ俄よ大聲を上ア、痛い
 て、、、誰ぞ爰へ針でも落ちておいたと見へるの婿夫の不
 思議です誰も其處らへ針の落とし升まいといはれて氣拔太
 の心付腹の内よ思ふやうエイッハ何でも門番の細君に尻

を縫せた遺恨であの親父めが針を一本入れておめたよ違へいねへ併し爰で尻をまくつて見る譯も行きひさいめよ合せやアがつたなア婿に見ましたが何もありませんから先お掛なさいばんへイ私に立てぬる方が勝手に御座いやす一ト廻女中衆の方を廻て参りやせう斯て四時ともありければ主人の婿の客よ向ひて主人もう御膳が出来ました皆さん次へお出ください男方や汚婦人を別よしては興がありませんから汚一所よ致しましたサアくどせき立れば一同の立上りて銘々座よ付えよ氣拔太の股引よさゝりたる針を恐て一番跡よて席よ至りしよ幸ひ椅子の皆塞

たればばんもう椅子がありやせんから私は立て戴きやせう主人イ、エお掛あさらさいではいけません椅子の幾許でもあり升早く椅子を持ってきなと聲掛れば下婢の奥より忽地持来りて氣拔太は傍に置其儘奥へ行よけりばんお掛ひくださるな却て此方が勝手に汚座いやす主人イ、エ少しもお構ひ申しの致しませんサア爰へお掛なさいオットこちらへおよりなさいさあ直にお掛あさい此時氣拔太モシくして居たれば主人の遠慮すると思ひて肩よ手を掛無理に腰を掛さすれば氣拔太の大聲にてア、イ、ア、イ、イ、と顔をまかむるよぞ主人は膳をつぶし何も椅子は上

よあらう譯はなし、どうなさいました ぼん捨て置てください
 いア、イタ、ア、イタ、と苦しき顔色よて人の近づくを嫌
 いたり斯くて婿の此体を見るより氣拔太の後、廻り抱起
 していふやう婿なぜお掛さる度毎に苦しい聲をお出し
 でそといひつゝ、氣拔太の上衣をまくりて股引の尻を見れ
 バ長き針がさゝりて糸もぶらさがりておたれば思はず吹
 出したるを主人の立寄り静よ其針を抜取てチャ、こん
 な針がさゝつていたもの嘸痛渉座いたしましたらう婿さん
 何をそんなまあ笑ひだへ婿で免なさい股引の事が餘りか
 笑ひうち竟笑ひ出しました主人もうそんな事はいはずよ

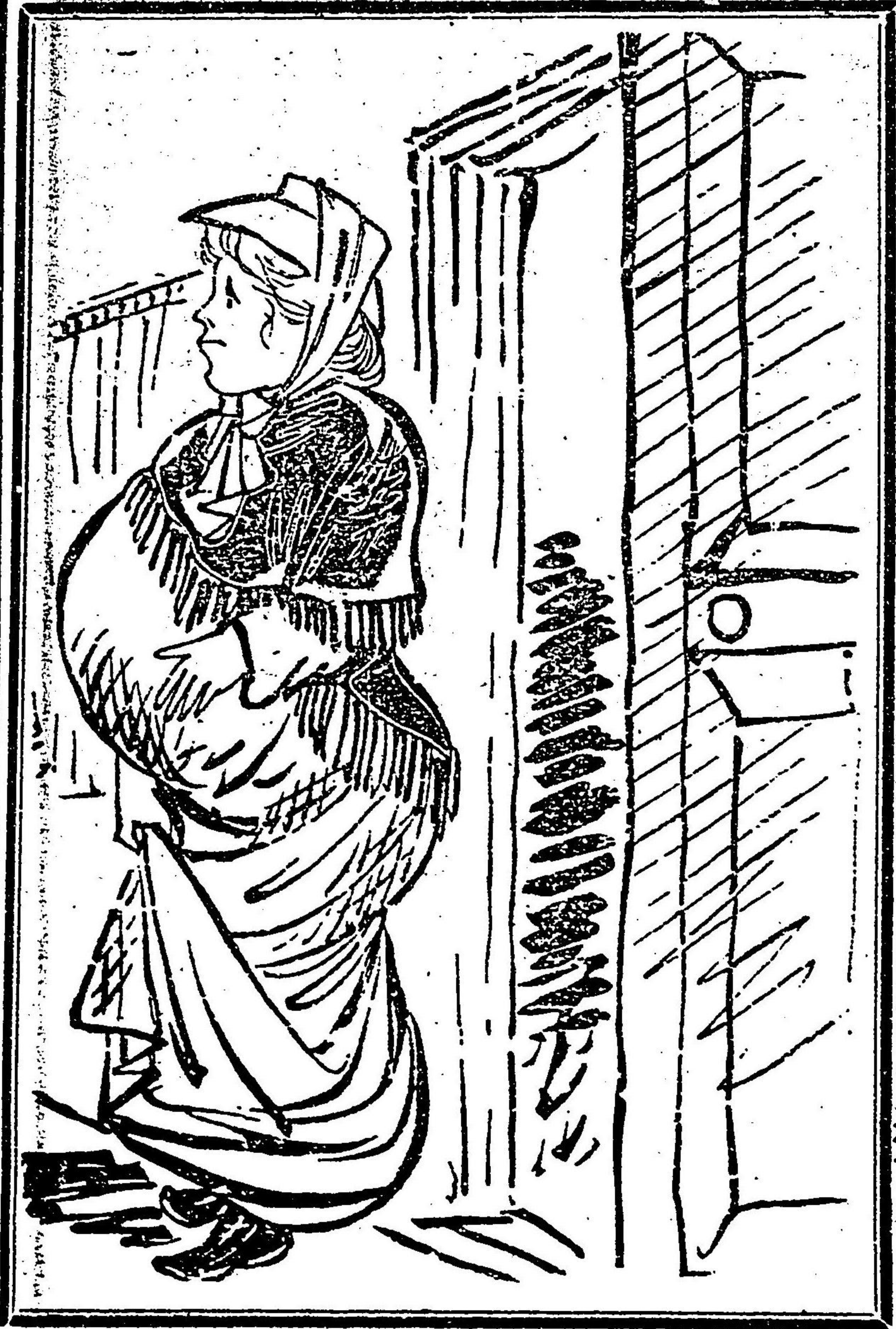
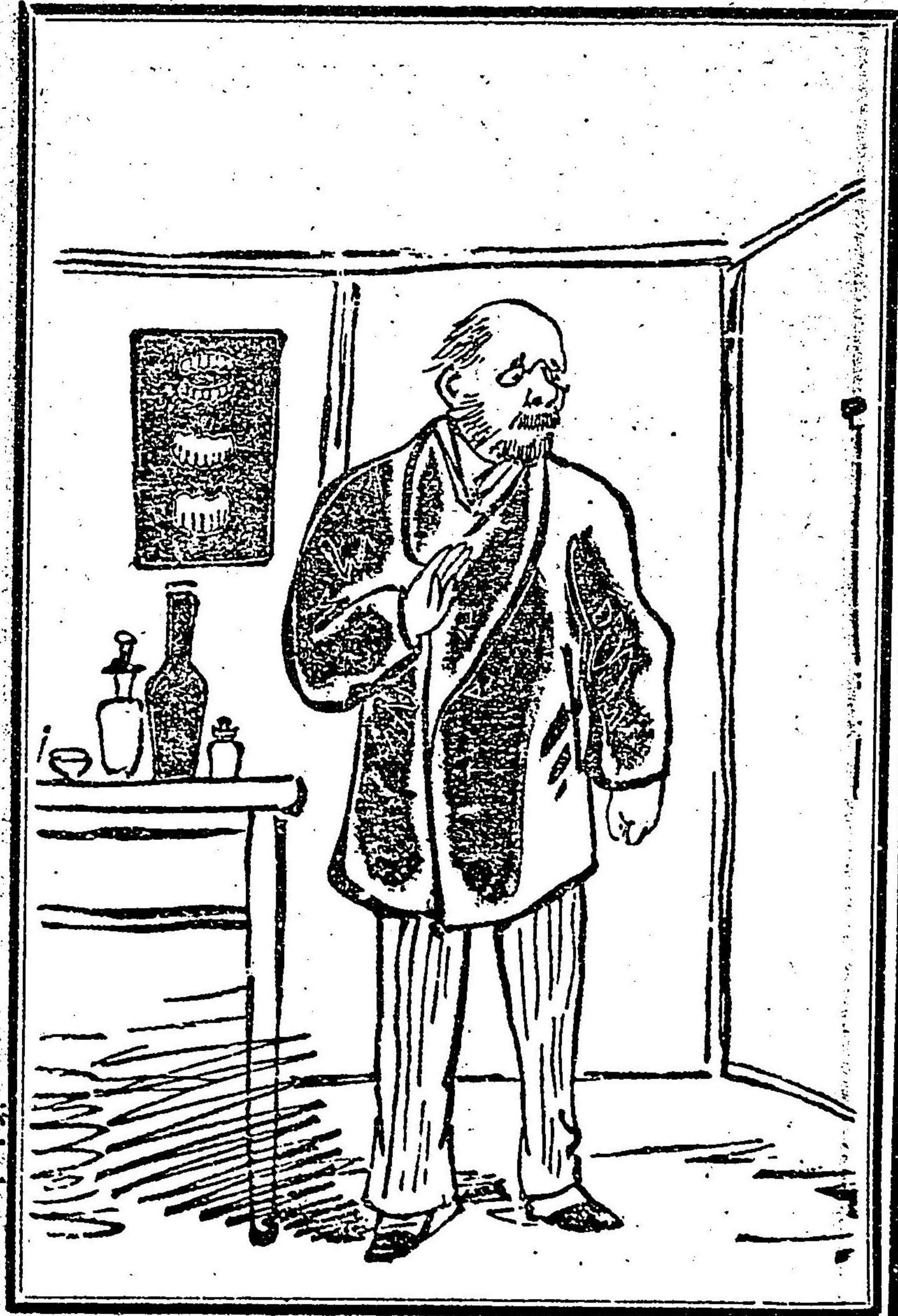
サアお膳へお付ください 氣拔太さんもと遠慮なしとサア
 〱 お掛くださいといはれて氣拔太の少し安心したれど
 婿の方への向ざりけり婿の又折々氣拔太を見て吹出せま
 かバ近くの人々の何事かと婿よ問掛れば婿の笑ひあがら
 左様ささうお尋なら申しませうが今晚のお笑ひ草といふ
 の外でもない一ツの股引を三人で用ひたと申す大笑ひの
 お咄さど聞より氣拔太の立上りいくらでも悪くかいひな
 せへ私わ十分御馳走よなりやしたからお暇といたしやせ
 うと主人よ挨拶もせずころ〱と二階を降りて戻りけり

午前五時過とも覺しく夜も明わたりし頃門番の家を廻り掃除してぬたりしに氣拔太の歸來しが昨夜の恨のありければ言葉も交すして早くも家の内にぞ入りよける然るよ齒醫師の部屋にて何やら騒敷争ひ叫ぶ聲しければ氣拔太の聞て立止り暫時手を組窺ひしよ腹内よ思ふ様扱の昨晩いたづらして門札を掛替たるより事起しあらんと猶も此舉動を聞ぬたり斯て隣家の桶屋よてハ其妻兼て今月が産月なりしに俄よ虫氣づきて腹の痛も堪がたければ曉を待て亭主よ向ひ妻私しや腹が痛んでなりませんかから最今よも生るゝりも知れません早く産婆を呼でください早く

とせき立れば亭主ハ周章て飛出し隣家に至りて門番よ問けるやう桶屋此内よ産婆が居るさうですが誰ぞ案内でもする人がをり升か門番と勝手よか這入なさい皆んな門口よ札が掛けて居り升と聞より桶屋の内に入り見れば部屋の入口よ産婆の二字が記してあれハあいたしく戸をたゝき呼立るよぞ齒醫師ハ驚き眼を覺し寐卷の儘にて戸を開き齒醫何の事か騒々しい私ハ火事でも始つたかと思ひました何ぞ急用でもあるのですか桶屋急よお頼申した事があり升が時よあなごが先生で御坐いやすう齒醫左様さ私です桶屋人から聞ましたにハ女と申事ですが齒醫

「夫の人が虚言を云たのでせう 桶屋「ろりやア女でも男でも
 構ません 上手でさへあれはいひのです 齒醫「ご安心なさい
 私の手際の誰も知らぬ者のありませぬ直も治て上ます
 マア些こちらへお這入るさい 桶屋「夫よの及ませんから直
 よ支度をあされて私と一所よお出ください 齒醫「ア、それ
 ぢやアあなたでないのですかといふを聞て桶屋の吹出
 し 桶屋「ああなたの戯言者ですぬへ 齒醫「それぢやア誰ですか
 桶屋「私の女房です、昨晩うら惱んで居りやす 齒醫「さうです
 か、あらふなら爰へ連れてお出なさい直も抜て上り 桶屋「逆も
 連れて来る譯よのいさやせんうら宅へお出なすつて抜てく

ぶせへ 齒醫「久敷お痛ですか 桶屋「左様さ九箇月の世間並で
 左程痛事もありやせんが今月の丁度臨月故其處で痛出し
 たと見へやすのさ 齒醫「是のしたり腐敗た様なものを九箇
 月も捨て置きなさるとい 桶屋「何をかいひあさる私が何し
 に腐敗物を作りやせう 齒醫「私よのあなたにいふ事がちつ
 とも分りませんが兎も角も着物を着換てお宅へ出ませう
 桶屋「直もお出たせへ 齒醫「時よ前歯ですか奥歯ですか 桶
 屋「何どかいひなさる男の子か女の子の子のお尋か夫の前から
 分るもれですか 齒醫「私は男だの女だのお尋の致しません
 細君のお扱あさる歯の何歯かとお問申すのさ 桶屋「歯とい



何の事です到底子供が満足よ生れさへすりやアいひれで
 す齒醫「そんならお産の事でお出なすつたのか馬鹿々々し
 い私の齒醫師で産科の致しません桶屋「そんならおせ門口へ
 産婆といふ札を掛てお置なせいやす齒醫「そんな札の掛た
 事のありません桶屋「何で私が虚をつきやせう齒醫「此人の
 ヲア眼を能洗つてお出なさい今曉から何のこつて桶もし
 札よ産婆と書てなければ齒を抜換りよ鼻を捻切ます桶
 屋「鼻くらいおろか首でもよいかトサア出てお見なさいと
 互の争ひ駈敷ければ戸外に亘たる氣抜太の腹を抱へて笑
 ひしよ折節聞はしく入來る人のありければ誰やらんと見

歸るよ丸き帽子を冠たる年三十五六ばかりは婦人左の頬
 を押へながら階子を昇りて三階へ行齒醫師と記したる標
 札の前よ亘て鈴を頻に鳴しけり此時氣抜太も跡より三階
 よいたり産婆が部屋の脇よ隠て様子如何よと窺しに彼婦
 人の餘り痛や強かりけん會釋もなく戸を開きて内よ入産
 婆を見ていふやう婦人「おバあさんア、痛々々昨晚から、ち
 つとも寐ませんぞふぞ早く療治をしてください産婆「、
 見た所での餘り大きくもありませんが初てやすらもう一
 度おあんあすつたのうへ婦人「ハイもう五度も抜ました産
 婆「お抜なすつたとへ大抵無理よ抜ものでありませぬ静

よ出さないぢやア いけません 婦人「そんなら痛くないやう
 よしておくれですか 産婆「どうかさうしたいものと思ひ升
 よ 婦人「何しろ少しも早くか頼申升 産婆「今直よ支度を致し
 升よといひつゝ、奥よ入しよ 彼婦人の椅子よ掛り口を開き
 て待たるを産婆の立出でこの体を見て不思議と思ひなせ
 そんなよ口を開くのですそれよ椅子の上でいけません
 から兼臺の上へ横よおなりなさい 婦人「私ハ今迄幾度も扱
 て貰ひましたが兼臺の上ハ今日が始めていす定めし流儀
 違ひでせう 産婆「イエ、誰も同じ事ですそんなよ口を開
 ていけません 婦人「そんなら何處から出すのです 産婆「夫

ハあなたも始めていハたし御存じでせうマア平よおなりな
 さいその様よ縮でいけません 成丈口を閉で今よ意氣む
 のですよ 婦人「なんぢおバアさんの人を馬鹿よなさるのか
 へこんな形をしないでもいひぢやア ありませんか口を開
 ずよ齒が抜るものですか 産婆「何ですと齒を抜どいひの
 か先刻から二時間もお嘸し申すよどふもお笑と思つてお
 ました 婦人「見てくださいソラ奥から二番目の黒くあつて
 めるのさ分ましたか 産婆「實よ馬鹿々々しい齒が痛とて今
 曉から起されて騒がれぢやア 困るぢやア ありませんか此
 産婆が何から齒扱よなりましたへ 婦人「わたしやこちらの

看板を見て来ましたのさ 産婆「お前さんまだ眼が覺ないの
 でせう 寐ぼけちやア いけません 齒醫師の一番下の部屋よ
 居升よ 婦人「わたしや 昨晚から寐あかつたから 寐ぼける譯
 もなし 慥よ 門口よ 齒醫師と記してあるものを 産婆「そんな
 事ありません そりやア 讀違へでせう 婦人「馬鹿をかいひ
 であい 讀違ひしませんよ 兎も角も 門口へ出て 御覽さうし
 て 門番を呼で 見ませう 産婆「ア、何處へでも 行て 見ませう
 と 此二人が 争ひを 聞より 氣拔太の腹を抱へて 己が部屋よ
 を 戻りける 斯て 下座敷よ 齒醫師との 争ひあり 爰よ 産
 婆との 纏ありて 何れも 門口よ 出たるよ 標札が 違たれば 産

婆も 齒醫師も 不思議よ 思ひ 門番を 呼付て 問けれど 更よ
 知れざれば かうして 置れぬと 頻よ 吟味を 始めしよ 何事
 ならんと 野呂吉と 甚六も 來りしが 氣拔太の 部屋よ 籠りて
 笑ひしかば 彌氣拔太の 仕業なる 事と 分り 野呂吉 甚六も 共
 に 詫入て 中裁も 濟跡の 大笑ひと ぞありよ ける
 めでたし 〳〳

西 洋 三 笑 人 終

明治十二年五月一日版權免許
同 十七年六月六日再版御 屆
同 六月 出版

譯者

東京府士族

山田保

京橋區木挽町九丁目
十六番地

出版人

東京府平民

早川新三郎

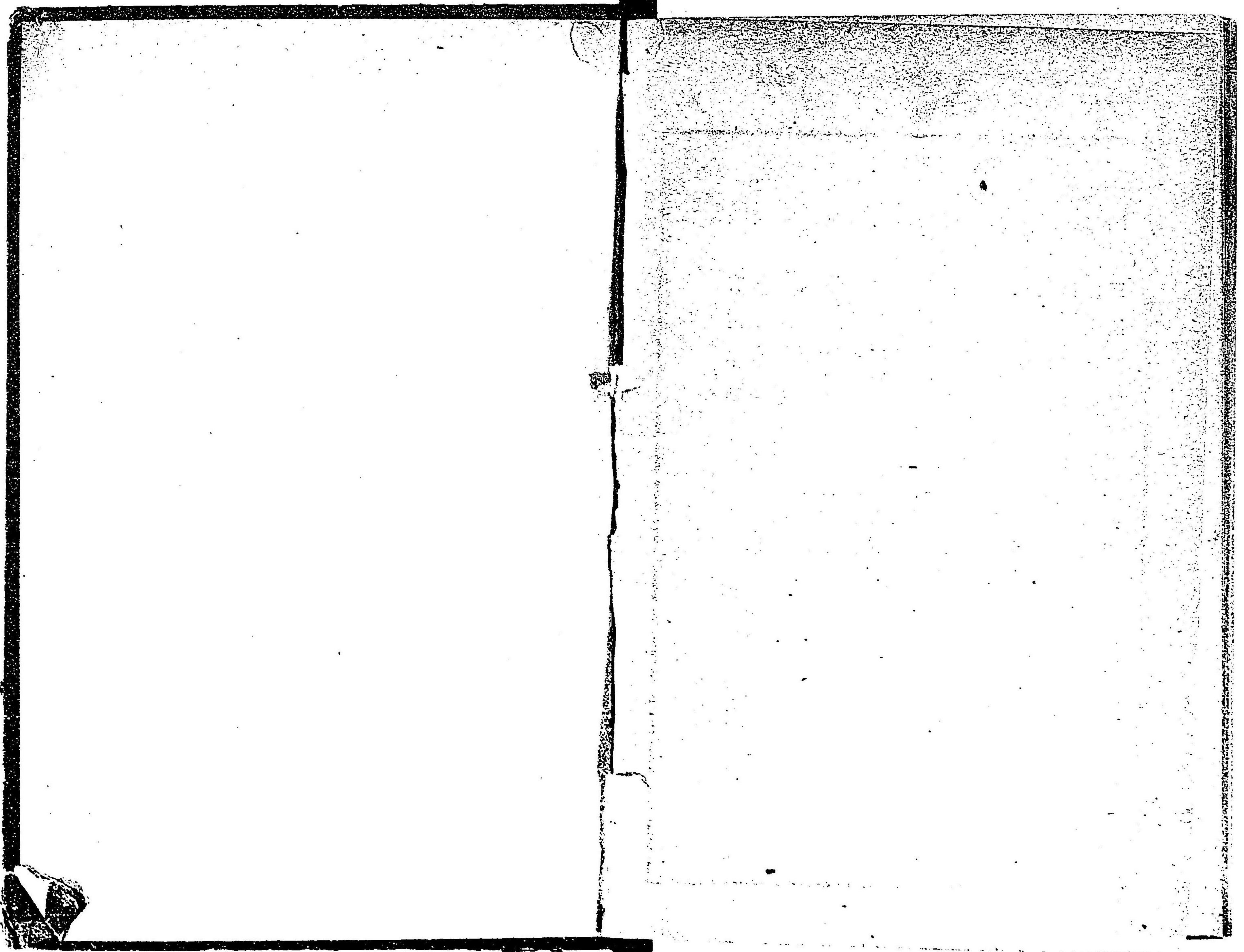
本郷區本郷四丁目
十六番地

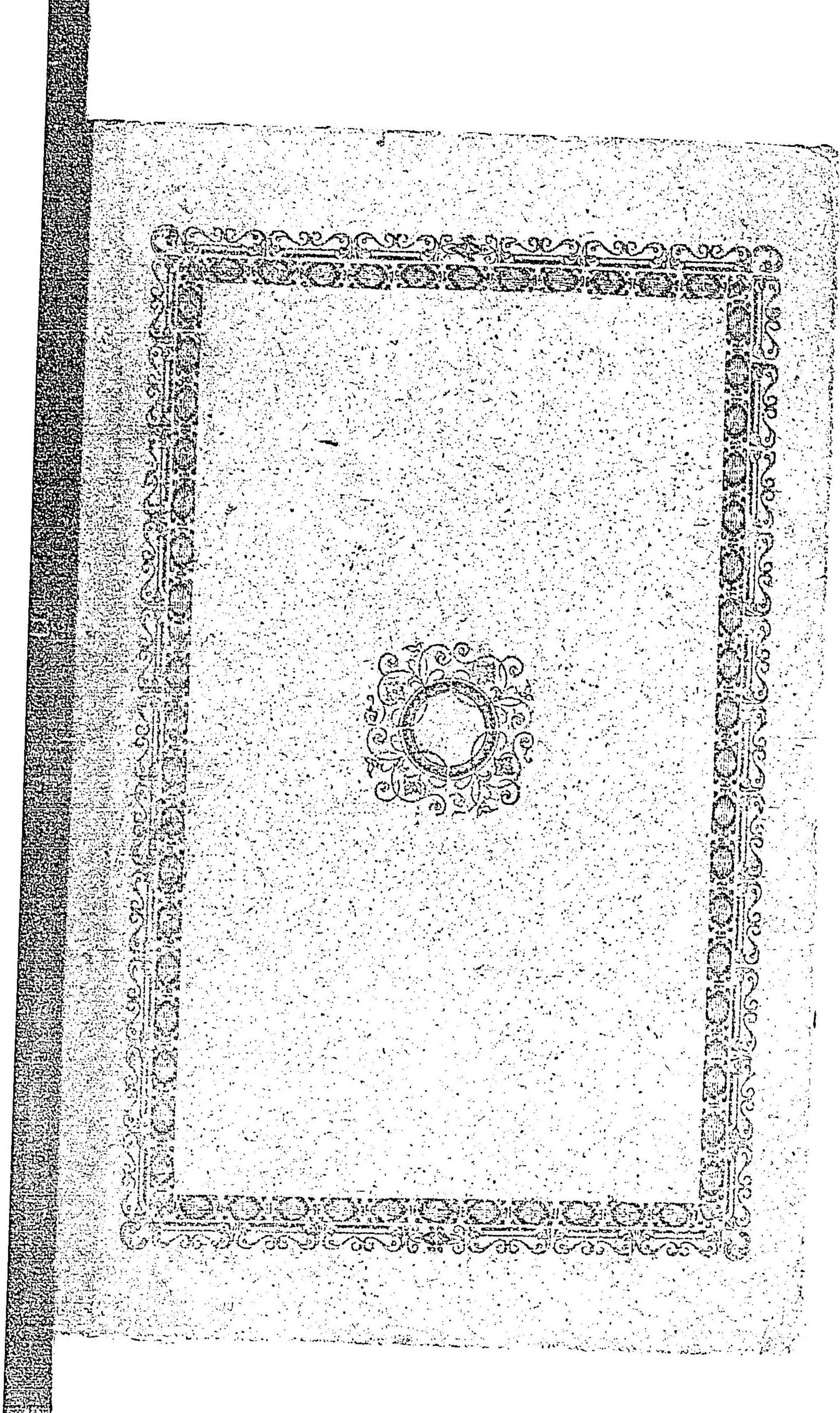
肆書賣發

東京神田五軒町	同 南鍋町一丁目	同 橫山町	同 室町三丁目	同 神田雉子町	同 南傳馬町一丁目
潛 必 堂	兔 屋 堂	鶴 聲 社	滑 響 堂	巖 々 堂	陽 堂
同 日本橋西川岸	同 通三丁目	同 橫山町三丁目	同 芝三島町	同 元大坂町	同 木挽町一丁目
內田芳兵衛	丸善書店	辻岡文助	山中市兵衛	法水德兵衛	萬字堂

肆書捌賣縣諸

橫濱	西京	大坂	攝州	伊勢四日市	同 津	尾州	三河	遠州	甲州	武州熊谷	下總千葉	同 八日市場	同 八日市場	同 陸水戶	同 陸水戶	近江大津	美濃岐阜		
丸屋善八	田中治兵衛	吉岡平助	竹中眞治	伊藤善太郎	淺野東助	片野東四郎	本屋文吉郎	白木健次郎	徵古堂	松枝悅三郎	乙亥舍	立眞舍	木内嘉兵衛	根本勝之助	川又銀藏	高木直次郎	三浦源助		
同大垣	信州長野	同小諸	同松本	上州高崎	下野栃木	同宇都宮	磐城棚倉	同白川	同二本松	磐代福嶋	陸前仙臺	同石ノ巻	同涌谷驛	陸中盛岡	同 陸中盛岡	同 陸中盛岡	同 陸中盛岡		
岡安慶助	小山喜太郎	高美甚左衛門	文心堂	叶屋儀右衛門	田中庄太郎	松屋常吉郎	奥村市右衛門	齋藤彦太郎	伊勢安右衛門	三陸屋利兵衛	久道物五郎	佐藤庄兵衛	澤田正助	松森嘉助	野崎九兵衛	八文字屋太右門	羽前山形		
同七日町	同鶴夕岡	羽後大曲	同橫手驛	越前福井	越後新潟	同三條	同高田	雲州松江	播州姫路	備後尾道	藝州廣島	紀州和歌山	淡路須本	伊豫松山	泉州堺	肥前福岡	肥後熊本	豐後大分	渡嶋函館
北國屋彌平治	小池藤次郎	板屋五郎左衛門	渡邊八右衛門	酒井安兵衛	林留吉	樋口屋小左衛門	室直三郎	園山喜三右衛門	山野長平	三木半兵衛	松村善助	平井文助	福浦文藏	土肥奧平	鈴木久三郎	肥前福崎	肥後熊野	常野嘉兵衛	常野嘉兵衛





特13

554

101026-000-6

特13-554

三笑人

山田 保 / 抄訳

M17

DBY-0308

